

# I.フィッシャーの「複本位制のメカニズム」

Fisher's *The Mechanics of Bimetallism*

片 桐 謙  
Katagiri, Ken

## ABSTRACT

When Irving Fisher wrote *The Mechanics of Bimetallism* (1894), he was sympathetic to the system under certain conditions. Starting from the operation of a commodity money standard, he tried to determine the conditions. He furnished a reservoir diagram for the analysis of the bimetallic mechanism. His analysis was based on the substitutability of gold and silver as money. He contended that the “dynamic equilibrium” would last under bimetallism by introducing the optimum legal ratio.

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 商品貨幣本位
- 3 複本位制のメカニズム
  - 3.1 グレシャムの法則
  - 3.2 金と銀の代替性
  - 3.3 複本位制における均衡
- 4 おわりに

## 1 はじめに

貨幣経済において貨幣量が実体経済にどのような影響を与えるかに関する議論として、貨幣数量説は古典的なマクロ経済分析の重要なツールである。19世紀初めイギリスの地金論争から通貨論争を経て通貨学派の立場が認められ、1844

年ピール条例において貨幣数量説は制度化されることになった。その基本的命題はその後、新古典派、さらに戦後になるとマネタリズムへと受け継がれていった。この歴史的潮流の中で1870年代から90年代にかけて、貨幣数量説は「復活<sup>(1)</sup>」した。一般に貨幣理論は歴史的経験に依存するといわれるように、当時の現実的問題がこの貨幣数量説の「復活」を要請した。

合衆国は1900年に公式に金本位制を採用する。1792年から1873年まで法制上は金銀複本位制だった。しかし1862-78年のグリーンバックス期を除いて、1830年代半ば以降、実態は金本位制にあった。

19世紀後半の合衆国の金本位制はデフレーションと相次ぐ恐慌によって特徴付けられ、対内的にも対外的にも極めて脆弱だった。当時、実質的な主要先進国といえる金本位国でデフレ傾向は一般的な現象だった。合衆国は南北戦争期—1861-65年—にインフレを経験してただけに、その影響は一層、深刻だった。卸売物価指数は1865-79年に51%下落し、1879年に正貨支払いを再開した後、1879-96年には更に48%下落した。そして1873-96年は「大不況期」といわれている。このような経済状況のなかで合衆国の貨幣制度は大いに不安定化し、合衆国の金本位制に対する対外的な信認も揺らいだ。

1861-78年グリーンバックス期の正貨支払い停止下に、グリーンバックスは金の価値を下回った。南北戦争直後には正貨支払い再開と通貨収縮、すなわちグリーンバックスの消却、へ向けて政府、議会、国民の間で合意が出来上がっていた。しかしその合意はデフレ圧力の高まりによって瓦解する。その後、1896年まで続く通貨収縮主義と通貨膨張主義との対立の始まりである。1875年に1879年1月1日をもって正貨支払いを再開することが約束される。そしてその後、グリーンバックスの価値は1879年の正貨支払い再開へ向けて、徐々に金との等価を回復していった。

しかしその一方で、金本位制に代わって複本位制<sup>(2)</sup>を確立しようとする勢力が台頭していた。合衆国では1834年以降、銀ドルは地金としての価値が鑄貨とし

(1) Willis (1896) p443, Hegeland (1951) p94

での価値を上回り、実質的には流通から消滅していた。そして1873年に銀ドルは法律上、廃貨された。これに加えてフランスの1874年の銀貨鑄造の制限と1878年の銀廃貨、ドイツの1871-73年の銀本位制から金本位制への移行によって、銀の価格は下落し始めていた。通貨膨張主義者と銀生産者は、法定比価16対1での銀の自由鑄造を要求する自由銀運動の下に協調する。この自由銀運動の高まりへの譲歩として、正貨支払再開の前年の1878年と1890年には財務省による銀の一定量の購入が定められた。これらの法律は合衆国の金本位制維持に関する能力および姿勢への疑念を高めることになった。1893年恐慌は合衆国の金本位制の危機として現われ、1890年の銀の購入法は廃止された。そして自由銀運動は1896年W.J.Bryanによる「金の十字架」演説で頂点に達する。

複本位制の採用は、こうした大衆レベルにとどまらず、学問的見地からも議論された。代表的な論者として、I.フィッシャー、J.S.Nicholson、F.A.Walkerらを挙げることができる。そして彼らはいずれも貨幣数量説に立つ。貨幣数量説を批判し、複本位制を否定するJ.L. Laughlinは、貨幣数量説と複本位制との関連を次のように述べている。「…あらゆる国々で貨幣数量説を強調する多くの種類の書物を見つけることができる、なぜならそれは複本位制の本質的な基礎だからである。世界の貨幣作用の増加を果たすには金量が不十分だという理由で、金と銀を共に同時に用いることが主に論じられる限り、複本位制に賛成する議論には必ず貨幣数量説を見出すことができる。」<sup>(3)</sup>しかしこれら貨幣数量説論者の間でも、複本位制に対する見解は一様ではない。また彼らが支持する複本位制の内容にも相違があった。

本稿はI.フィッシャーの「複本位制のメカニズム」論を考察する。彼の生涯

ㄨ(2)「複本位制」を意味する英語は、“double standard”と“bimetallism”である。1870-90年代、欧米での複本位制論争を通じて、後者が一般的に用いられるようになった。複本位制の擁護者E.Seyd(1868)は“double valuation”を用いる。複本位制によって二種類の金属が価値尺度となり、それらの金属は通常、金と銀からなる。スウェーデンは1772年に銀銅複本位制をとっていた。

(3) Laughlin (1903) p281

を通じて、貨幣制度に関する記述には紆余曲折が見られる。しかし「複本位制のメカニズム」論に関する限り、その主張は一貫している。彼の「複本位制のメカニズム」論は1894年の執筆当時から、L.Walrasのそれと並んで、評価されていた。<sup>(4)</sup> また今日においても複本位制を論じる際、その理論的基礎と位置づけられていた。<sup>(5)</sup>

以下、1ではフィッシャーの購買力概念を検討し、彼の商品貨幣本位論を検討する。2では彼の「複本位制」把握と複本位制成立・存続の条件を明らかにする。

## 2 商品貨幣本位

フィッシャーの「購買力」概念の検討から始めよう。<sup>(7)</sup> フィッシャーは金の自由鑄造と自由溶解のもとでは「貨幣としての金の価値」と「地金としての金の価値」は等しい、すなわち「均衡」が成立するという。「金地金の価格が同量の地金をもって鑄造される金貨の価格よりも大であるとすれば」<sup>(8)</sup> 地金取扱業者は金鑄貨を地金に溶解して収益を得る。「金貨の溶解の影響は金貨の量を減少させ、金地金の量を増加させる、そして地金としての金の価値を下落させ、貨幣としての金の価値を上昇させる、そして物価水準は下落し、地金と貨幣の均衡を回復する。<sup>(9)</sup>」逆に「地金の価格が金貨の価値よりも低ければ」、<sup>(10)</sup> 彼は地金を鑄造してもらい、収益を得る。先とは逆のルートを通じて両者の均衡が成立する。現代の自由鑄造と冶金技術のもとでは、鑄造と溶解に費用も時間的な遅れも要しない

(4) Walras (1881) 本稿では、Walras (1926) を参照した。J.A.Schumpeter は Walras の複本位制論を高く評価している。Schumpeter (1910) p401, (1954) p1076, 邦訳 6, 2263 ページ

(5) Edgeworth (1895)

(6) cf.Chen (1972), Friedman (1990), Flandreau (1996), (1997), Oppers (2001)

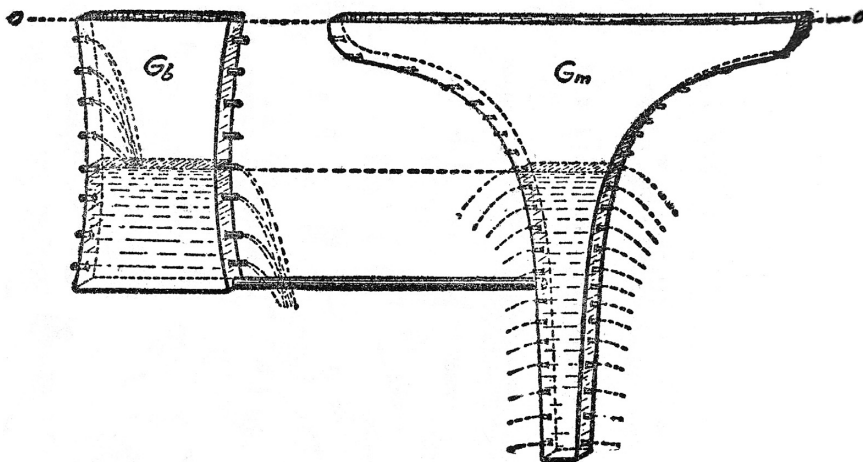
(7) cf.酒井 (1977) 75-86 ページ, Bordo (1984) pp51-52 フィッシャーの「購買力」概念を前者は批判的に、後者は肯定的に考察している。

(8) Fisher (1922) p97, 邦訳 129 ページ 以下、邦訳のページ数を記した場合は、邦訳を参考にしようえでの、筆者の訳である。そのため邦訳とは一致しない。そして邦訳のページ数を記さない場合、当該箇所は原著の Appendix に収められており、邦訳書では省略されている。

(9) Fisher (1922) p97, 邦訳 129 ページ

(10) Fisher (1922) p97, 邦訳 129 ページ

図 1



(出所) Fisher (1922) p105

ので、鑄造料や鑄潰し費用を考慮する必要はない<sup>(11)</sup>。こうして「鑄貨としての金の価値と地金としての金の価値は等価となり」<sup>(12)</sup>、それは「金の価値」<sup>(13)</sup>と  
 言い表すことができる。ここからフィッシャーは、「貨幣量、それ故、貨幣の購買力は直接、金地金の量に依存する」<sup>(14)</sup>という結論を導き出す。

彼はこれを水力学を援用して説明している (図 1 参照)。すなわち地金 ( $G_b$ ) および金貨貯水池 ( $G_m$ ) を想定し、地金および金貨の購買力は、それぞれの貯水池の 00 以下水面までの距離によって示される。地金貯水池の流入口は金生産を、流出口は工芸用の使用を表す。この地金貯水池とパイプで結合された金貨貯水池の流出口は金貨の摩滅を表す。そして地金および金貨ストックそれぞれの増加 (減少) に伴って地金および金貨それぞれの購買力が低下 (上昇) する論拠とする<sup>(15)</sup>。

(11) Fisher (1922) p98, 邦訳 130 ページ

(12) Fisher (1922) p97, 邦訳 130 ページ

(13) Fisher (1922) p99, 邦訳 131 ページ

(14) Fisher (1922) p98, 邦訳 130 ページ

先の引用でフィッシャーは、まず「金地金の価格」を「同量の地金をもって鑄造される金貨の価格」、すなわち金の鑄造価格と比較し、次には「地金の価格」を「金貨の価値」と比較している。フィッシャーによれば、金貨と金地金との流れの方向を規定するのは、金の鑄造価格と金地金の市場価格の高低であり、両者の「相対的關係 (relative state of things)<sup>(16)</sup>」である。そして一方から他方へ流れによって「地金としての金の価値」と「貨幣としての金の価値」の等価が成立し、「金の価値」すなわち「貨幣の購買力」が導出される。しかしここで地金の価格と金貨の価格の乖離と、地金の価値と金貨の価値の乖離との関係は明らかではない。フィッシャーのいう「均衡」とは、金本位制のもとで地金の市場価格が鑄造価格に統一されることをいうに過ぎない。彼によれば「購買力」＝「価値」＝「価格」であり、価値および価格概念に著しい混乱がある。

フィッシャーは自由鑄造と自由溶解のもとでは鑄造と溶解に費用も時間的な遅れも要しないことを根拠に、鑄造料と鑄潰し費用を考慮から除外する。これを踏まえた上で、地金の市場価格が金の鑄造価格を基準として騰貴する場合を考えよう。金地金の市場価格が金の鑄造価格を上回るのは、金鑄貨の品位が低下する時が考えられる。例えば、価格の度量標準が1ポンド金貨＝金1/4オンスであるとしよう。そして摩滅、盗削等によってこの鑄貨は軽くなり、1ポンド金貨の重量が金1/5オンスになったとしよう。地金市場では実質的内容に従って、金地金1オンスは5ポンドの金貨と等しいと評価される。金1オンス＝4ポンドの鑄造価格が、金1オンス＝5ポンドの鑄造価格に修正された。この軽い鑄貨は鑄貨としては、軽い鑄貨ではなく、完全量目の鑄貨として通用する。しかし地金市場では、実質的内容によって評価される。このように金地金の市場価格が鑄造価格を上回る、すなわち金地金にプレミアムが付くのは、鑄貨の品位が低下したためである。フィッシャーによれば、「もし金地金の価格がそれから鑄造される貨幣よりも高ければ、その差がいかに小さくとも、地金を必要とする金の使

(15) Fisher (1922) pp104-106, 邦訳 138-140 ページ

(16) Fisher (1922) p106, 邦訳 140 ページ

用者、特に貴金属商は、金貨を地金に溶解することによってその差を得るのである<sup>(17)</sup>。」しかしこの場合、実際は、その軽い鑄貨を溶解するのは不利であるから、フィッシャーのいうように鑄貨ストックの減少、地金ストックの増加を通じて、両者の等価が回復することにはならない。彼は地金の市場価格が鑄造価格を基準として騰落する状況を、地金の価値と金貨の価値の相対的变化としか把握できない。しかもそれがストックの増減を通じて調整されると考えている。

さらにフィッシャーによれば、金地金および金貨のストックが相互に影響し合うと同時に、両ストックは金の生産と消費というフローによっても影響を受ける。金生産は金鉱の採掘量であり、常に金地金および金貨ストックを増加させる。金の消費とは工芸での地金の使用、通貨としての摩滅等<sup>(18)</sup>、である。「もし我々が金貨および地金の量をひとつの貯水池に入れたものとみなしたら、金の生産は金鉱からの流入、消費は工芸への、そして摩滅と損失による流出となるだろう<sup>(19)</sup>。」

フィッシャーは金生産の価格弾力性を次のような論拠で説いた。金生産は金の購買力と金の生産費の比較によって規定される。金の生産は費用逦増の法則によって支配されるから、「金の生産は常に、限界生産費が産出金の価値と一致する均衡に向かう傾向があるだろう<sup>(20)</sup>。」「もし金の購買力がある特定の金鉱の生産費を上回るなら、この金鉱を採掘するのは有利だろう。もし金の購買力がある特定の金鉱における生産費を下回るなら、その金鉱を採掘するのは不利だろう。それ故、金の産出量は金の購買力の上下に従って増減する<sup>(21)</sup>。」金の「生産が生産物の限界費用によって規定されるのと同様に、消費は消費される物の限界効用によって規定される<sup>(22)</sup>。」それ故、「金の価値（購買力）の下落によって金の

---

(17) Fisher (1922) p97, 邦訳 129 ページ

(18) Fisher (1922) p99, 邦訳 132 ページ

(19) Fisher (1922) p99, 邦訳 132 ページ

(20) Fisher (1922) p101, 邦訳 134 ページ

(21) Fisher (1922) pp102-103, 邦訳 136 ページ

(22) Fisher (1922) p103, 邦訳 137 ページ

消費は刺激され、他方、金の生産は減少することが分かる。<sup>(23)</sup>」

フィッシャーにとって、金の生産を規定するのは金の購買力と金の生産費、すなわち物価との相対的關係である。金の生産費を金で測るとしよう。物価が上昇する、すなわち金の生産費は上昇するのに、金の価格は不変なので、金生産者は不利になり、金生産は減少する。他方、物価が下落する、すなわち金の生産費は下落するのに、金の価格は不変なので、有利になり、金生産は増加する。同様の事態を金ではなく、商品一般で測ったとしよう。物価が上昇すると、貨幣の購買力は低下する。金の生産費は物価上昇と同じ程度で上昇するので、一定である。他方、金の価格は下落するので、金生産者にとって不利で、金生産は減少する。物価が下落すると、貨幣の購買力は上昇する。金の生産費は一定である。他方、金の価格は上昇するので、有利で、金生産は増加する。いずれにせよ、「金の生産費と金の購買力との間で比較がなされる。……それ故、金の購買力の上下によって、金生産は増加・減少する。<sup>(24)</sup>」しかし商品一般で測った時、彼がいう「金の価値（購買力）の下落によって……金の生産は減少する」事態は、実は、金で測った時、金の価格が一定のもとで、金の生産費の上昇、すなわち物価の上昇によって金の生産が減少することを言い換えたに過ぎない。貨幣数量説に立つフィッシャーは、金生産を規定する要因として物価を後退させ、代わりに金の購買力を一面的に強調する。<sup>(25)</sup> フィッシャーは以上のように、商品貨幣本位のもとでの貨幣商品金の生産を説明した。<sup>(26)</sup>

フィッシャーは、金地金および金貨ストックを媒介として、金の生産・消費、

(23) Fisher (1922) p104, 邦訳 137 ページ

(24) Fisher (1922) pp102-103, 邦訳 136 ページ

(25) 「こうして金の生産と消費を規定する物価騰落は、貨幣量を増減させる原因でありながら、この関係は数量説から除かれてしまう。しかしかれも、この矛盾に気づいていたようである。金鉱の生産費騰貴は諸商品価格の騰貴であり、物価騰貴であることは認めざるを得なかった。しかし金生産を左右する事情として物価を挙げることは、数量説の立場からしていかにも具合が悪い。そこでかれは物価騰貴について、金の価格を一定として生産費騰貴と見るのは金生産者の立場であって、もし他の商品（小麦）を標準として見れば生産費は一定で金の価格が低下したことになるであろう。それで金の価値の低下によって金生産が減少するのだ、という言い回しを採用しようとする。」酒井（1977）82 ページ



すなわちフローと金の購買力の変動は逆方向に作用するという。「金の価値（購買力）の低下によって金の消費は刺激され、他方、金の生産は減少する。このように貨幣の購買力は金の生産と消費との相反する作用によって影響を受け、上昇または下落する。」<sup>(27)</sup> この引用の前半では、金の購買力の変動が金の生産と消費に影響を与えるとしながら、後半では、金の購買力は金の生産と消費の影響を受けるという。フィッシャーは金の購買力の「変動」とフローとは相互を同時に規定すると考えている。フィッシャーの想定する貯水池のモデルからもこのことは明らかである。同時に、フローによって増減した金ストックによって物価、金の購買力の逆数、も決定される。「金地金の価値と金の生産費が貨幣量を通じて、物価に影響を与える」というのがここでのフィッシャーの結論である。<sup>(28)</sup>

フィッシャーの金の購買力規定にとって、先の「貨幣量、それ故、貨幣の購買力は直接、金地金の量に依存する」という結論と、ここでの「金地金の価値と金の生産費が貨幣量を通じて、物価に影響を与える」という結論の間にある論理レベルの差は重要な意味をもつ。すなわち前者で考慮されているのはストックのみであるのに対して、後者での焦点はフローにある。フィッシャーは金の購買力、物価の決定要因は地金および金貨ストックであると考えた。<sup>(29)</sup> 両ストック間の流出入を通じて地金の購買力と貨幣の購買力は「均衡」に落ち着く。そして生産・消費といったフローは金の購買力の変動要因としてのみ取りあげられる。

フィッシャーの貯水池モデルの通り、新産金は地金および金貨貯水池双方に直

↘ (26) フィッシャーは貨幣の購買力を決定する「主な要因」として金生産の価格弾力性を取り上げ、「その他の重要な変動」として、新しい金鉱の発見、金鉱の枯渇、金生産技術の進歩も考慮に入れている。Fisher (1922) pp108-109, 邦訳 142-143 ページ, 商品貨幣本位に関しては、Friedman (1953) も参照。

(27) Fisher (1922) p104, 邦訳 137 ページ

(28) Fisher (1922) p104, 邦訳 137 ページ これに基づいてフィッシャーは「価格とは財と本位貨幣との交換比率であり、その貨幣が交換の媒介物として使用されるか否かには関係無い。」という J.L. Laughlin を批判する。この Laughlin とフィッシャーの対立は、J.S. Mill の「貨幣の価値」論 (1865, Book III Chapter IX § 2) の解釈の相違に係わる。

(29) 「物価水準に影響を与えるのは、毎年の生産ではなく金ストックであるということ、そして生産が減少し始めても何年間も、実際、生産が消費を上回る限り、ストックは多分増加し続けるだろうということが憶えておかねばならない。」 Fisher (1922) p248, 邦訳 322 ページ

接、流入するのではなく、地金貯水池を通じて間接的に金貨貯水池へ流入する。「実際、多分、新産金を市場に従って金貨または地金に向けることによって、その均衡は維持される。こうしてそれぞれの必要に応じて二つの貯水池に注ぎ込むことによって、貨幣と工芸の間の多額の合流の必要が省かれる。<sup>(30)</sup>」フィッシャーによれば、この過程で二つの「均衡」が考えられる。「もし金の生産が増加したなら…地金貯水池への『流入』の増加となり、そこから通貨貯水池へも同様で、その結果、両方が徐々に満ち、それ故、貨幣の購買力の低下となる。」新産金が貨幣の購買力に影響を与えるのは、地金貯水池から通貨貯水池への流出が持続する限りのことである。「この過程は最終的に消費の増加によって阻止されるだろう。そして生産と消費が等しくなると、均衡が確立されるだろう。<sup>(31)</sup>」

しかし金の生産量と消費量が一致する保証はない。「万一、いかなる時でも流入が流出を上回れば、必然的に金ストックは増加するだろう。これは金の購買力または価値を低下させる傾向がある、しかし水面が上昇するやいなや、流入口は少なくなり、流出口は多くなる。一方で過剰な流入、すなわち産出は減少し、他方で、過少の流出、すなわち消費が増加し、流出と流入の不均衡を阻止する。他方、流出が流入を一時的に上回るなら、水面は低下する傾向があるだろう。購買力は上昇し、過剰な流出は阻止され、過少な流入が刺激され、均衡を回復する。正確な均衡点が実現されることはほとんど、または全くない代わりに、均衡点を行き来して振動する振り子のように、常に均衡を求める傾向がある。<sup>(32)</sup>」この均衡において、金の生産費は金地金および貨幣の量を通じて、間接的に金の購買力に影響を与えるに過ぎない。フィッシャーが強調するのは後者の均衡であり、この点は彼の「複本位制のメカニズム」論においても重要な意味をもつ。

---

(30) Fisher (1922) pp97-98, 邦訳 130 ページ

(31) Fisher (1922) pp108-109, 邦訳 143 ページ

(32) Fisher (1922) pp107-108, 邦訳 142 ページ

### 3 複本位制のメカニズム

#### 3.1 グレシャムの法則

フィッシャーの「複本位制のメカニズム」論は、1894年の「複本位制のメカニズム (*The Mechanics of Bimetallism*)<sup>(33)</sup>」と1911年(1922年)の『貨幣の購買力 (*The Purchasing Power of Money*)<sup>(34)</sup>』の7章に著されている。そして、「複本位制のメカニズム」論に関する限り、両者の間に相違はないと考えられる。

彼は「我々の最初の仕事は、その良否にかかわらず、複本位制はある条件の下では『作用』可能で、また実際に作用し、他の条件のもとではそうではないことを示すことである。」<sup>(35)</sup>と述べ、複本位制が作用する条件を導き出すことがそのメカニズムを説明する際の論点であるという。複本位制が成立しない場合には、グレシャムの法則が働く。

フィッシャーはいう。「グレシャムの法則……は通常、『悪貨 (bad money) は良貨 (good money) を駆逐する』と言われる。……しかしこの定式化は正確ではない。……正確に言えば、その法則はこう述べられる、安価な貨幣 (cheap money) は高価な貨幣 (dear money) を駆逐する、<sup>(36)</sup>と。」彼はその理由を、同一の金属からなる2つの铸貨を例にとり説明する。「悪貨」とは品位が劣った铸貨、「良貨」とは完全量目の铸貨のことである。品位が劣った、軽い铸貨が完全量目の铸貨を駆逐するのは、前者が「『悪』貨だからではない、すなわち摩滅し、曲折し、毀損し、または盗削されているからではない。」<sup>(37)</sup>铸貨はいったん流通に入れば自然と摩滅し、その実質的内容と名目的内容は分離する。さらに盗削によって人為的にも铸貨は軽くなる。この軽い铸貨は铸貨としては、軽い铸貨ではなく、完全量目の铸貨として通用する。しかし地金市場では、実質的内容によって

(33) Fisher (1894)

(34) 初版が1911年に、改定版が1922年に出版されている。本稿で用いたのは後者である。

(35) Fisher (1922) p115, 邦訳 151-152 ページ

(36) Fisher (1922) p113, 邦訳 148-149 頁 ゴシック部分は、原文ではイタリック。以下、同じ。

(37) Fisher (1922) p113, 邦訳 148 ページ

評価される。先の例のように、価格の度量標準は1ポンド金貨=金1/4オンスだが、摩滅によってこの鑄貨は軽くなり、1ポンド金貨の重量が金1/5オンスになったとしよう。地金市場では実質的内容に従って、金地金1オンスは5ポンドの金貨と等しいと評価される。他方、金地金1オンスは造幣局で4ポンドと、すなわち地金市場と比べて「安く」評価される。こうして軽い鑄貨は「安価な貨幣」に、完全量目の鑄貨は「高価な貨幣」となる。前者が過高評価、後者が過低評価されるのは共に、造幣局においてであることを、フィッシャーは強調している<sup>(38)</sup>。

そしてフィッシャーによれば、前者が後者を「駆逐する」のは、国内流通では支払者に貨幣の選択が委ねられ、彼が安価な貨幣を選ぶからである。高価な貨幣は退蔵、溶解される。他方、外国貿易では逆に受領者が貨幣を指定し、彼が高価な貨幣を要求するために、輸出される<sup>(39)</sup>。それ故、グレシャムの法則の作用は法貨規定が有効な国内流通に限定される。

### 3.2 金と銀の代替性

金と銀の経済学上の意義は金銀比価に関してである。この点に関して単本位制論者は一般に、次のように考える。すなわち、金と銀は共に、商品であり、貨幣でもあるという意味で、貨幣商品である。しかし金銀の二種類の金属を貨幣とすることは、価値尺度の単一性の要請に矛盾する。その現われが金銀比価の問題である。金銀市場比価は両者の交換比率であるから、金と銀それぞれの生産および消費条件によって市場比価は変化し、そこに人為的な介入の余地はない。市場比価は不断に変動しており、絶えず法定比価から乖離する傾向がある。そして過高評価された金属のみが流通に留まるという形で価値尺度の単一性が貫徹する。それ故、複本位制は不安定な存在であり、「複」本位制という言葉自体が矛盾である、と。

これに対して、フィッシャーは「複本位制はある条件のもとでは『作用』可

(38) Greenfield & Rockoff (1995) pp1086-1087

(39) Fisher (1922) pp113-114, 邦訳 149 ページ cf.Fetter (1932) p493

能で、また実際に作用」すると考えており、彼の「複本位制のメカニズム」論はまず、「既に確定した供給と需要のシステムに一定の法定比価が単に、重ね合わされるに過ぎないと考え、その比価はもともと失敗する運命にあることを証明しようとする<sup>(40)</sup>」単本位制論者に対する批判であった。彼はその論理を金と銀の代替性の観点から展開する。

フィッシャーは、貨幣としての金・銀の代替関係を商品の代替関係と対比する。まず、商品の代替関係について、「代替財または競合財の本質は、実際に生産され、消費される量の限界効用または価格が一定の比を維持する傾向があるということである。我々は完全な代替財を、この比が絶対的に一定のものと定義する<sup>(41)</sup>。」二つの代替財は「共通の要求を満たすための相対的な能力に基づいて<sup>(42)</sup>」、一定の代替比を保つ。「厳格な意味での代替財は、消費者によって、単一の商品とみなされる。これは商品が二つの同一の需要法則をもつという意味ではなく、連携して単一の法則を持つという意味である。それ故、価格決定の条件の数は通常よりもひとつ少なくなる。しかしその失われた条件は一定の代替比によって与えられる<sup>(43)</sup>。」「代替比が自然に規定される代わりに、価格比を規定する<sup>(44)</sup>。」

これに対して、「唯一、貨幣の場合にのみ、(金と銀の：引用者)一定の代替比は無い。……あるのは相対的な購買力である。貨幣の使用者はその効用を金属自体によってではなく、それで購入できる商品で数える。彼は価格を知る前に、砂糖や小麦に明確な効用を帰する、しかし彼はそれらをどんな比で評価するかを知る前に、まず金と銀の相対的な流通価値を調べねばならない。彼にとって代替比とは価格比に等しく、それ故、その比を規定するのに何ら影響を持たない。二つの形態の貨幣の場合は特殊である。それらは代替比の無い代替財である<sup>(45)</sup>。」

---

(40) Fisher (1922) p377

(41) Fisher (1892) pp65-66

(42) Fisher (1894) p527, Fisher (1922) p376

(43) Fisher (1894) p527

(44) Fisher (1894) p528

(45) Fisher (1894) p528, cf. Fisher (1922) p377

貨幣を除く代替財の価格決定に際して、「一定の代替比」によって未知数の数と条件式の数は等しくなり、未知数を決定することができる。しかし貨幣としての金と銀の間には「相対的な購買力」が存在するだけで「一定の代替比」が無いので、「条件の数は未知数の数よりもひとつ少なくなる。」<sup>(46)</sup>そこでここに「人為的な比の余地がある。」<sup>(47)</sup>すなわち金銀法定比価を定める意義がある、とフィッシャーは考える。さらにこれに続けて、「しかし我々はその人為的な比が失敗する限界があることも知るだろう。」<sup>(48)</sup>と述べ、一定の条件のもとでは、いったん「人為的な比率」＝法定比価を定めれば、金銀の「相対的な購買力」＝市場比価はこのバンド内を変動し、その限りで複本位制が存続しうると考える。こうして彼の「複本位制のメカニズム」論は、単本位制論者に対してと同時に、盲目的な複本位制論者に対しても向けられた。

フィッシャーは貨幣としての金と銀の代替性を次のように把握している。「代替財とは、高価な貨幣の代わりに安価な貨幣が用いられるという意味に過ぎない。これはグレシャムの法則であり、証明されている事実である。」<sup>(49)</sup>彼は鑄貨の法貨規定をグレシャムの法則の要件と考えていた。金貨と銀貨が共に無制限法貨であるなら、それらは共通の基盤にたった代替財であり、無制限法貨であることが完全な代替財であるための第一条件である。

そしてフィッシャーは貨幣としての金と銀の代替性と、商品としての金と銀の代替性を明確に区別している。「貨幣の使用者は効用を金属自体ではなく、それで買える商品で測る。彼は価格を知る前に、砂糖や小麦に明確な効用を帰す、しかし彼はそれらをどんな比で評価するかを知る前に、まず金と銀の相対的な流通価値を調べねばならない。」<sup>(50)</sup>鑄貨の効用は購買力によって、地金のそれは物理的な量によって測定される。

---

(46) Fisher (1894) p528, fn.1

(47) Fisher (1922) p377

(48) Fisher (1922) p377

(49) Fisher (1894) p527, fn.2

(50) Fisher (1894) p528

そして支払いの際に貨幣の選択が受領者に委ねられるならば、金貨と銀貨は完全な代替財とはなり得ない。フィッシャーのいうように、その選択権が支払者にあることが、完全な代替財であるための第二の条件である。そして第三の条件が、先の通り、金・銀貨の間に最適な「人為的な比」が設定されることである。フィッシャーの「複本位制」把握は以上のような内容を含んでいる<sup>(51)</sup>。「複本位制のもとでは、政府は一定の比価で（金銀：引用者）両金属の自由鑄造を認める。…この制度のもとでは、契約によって別の具合に拘束されない限り、債務者は金貨または銀貨のどちらかで支払いをする選択肢をもつ。実際、以下が完全な複本位制の二つの必要条件である、すなわち（1）一定比価で両金属が自由かつ無制限鑄造されること、（2）その比価で各金属が無制限法貨であること。」

### 3.3 複本位制における均衡

フィッシャーによる水力学を援用した金銀複本位制のメカニズムの説明に移ろう（図2参照）。彼は出発点として、金本位制下の均衡状態を想定する（図2（a））。ここではフローを考慮に入れず、金地金の貯水池と（金）鑄貨の貯水池（ストック）の関係から、金地金の購買力と金貨の購買力とが等しい状態である。そして新たに法定比価 16 対 1 で銀の自由鑄造が始まり、法制上、複本位制になると仮定する。彼はこれを鑄貨の貯水池と銀地金の貯水池をパイプで接続することと捉える<sup>(53)</sup>。「次に鑄貨の貯水池の右側をパイプで銀地金貯水池と結合するとしよう、すなわち複本位制を導入する。」<sup>(54)</sup>（図2（b））金地金の貯水池（ $G_b$ ）と鑄

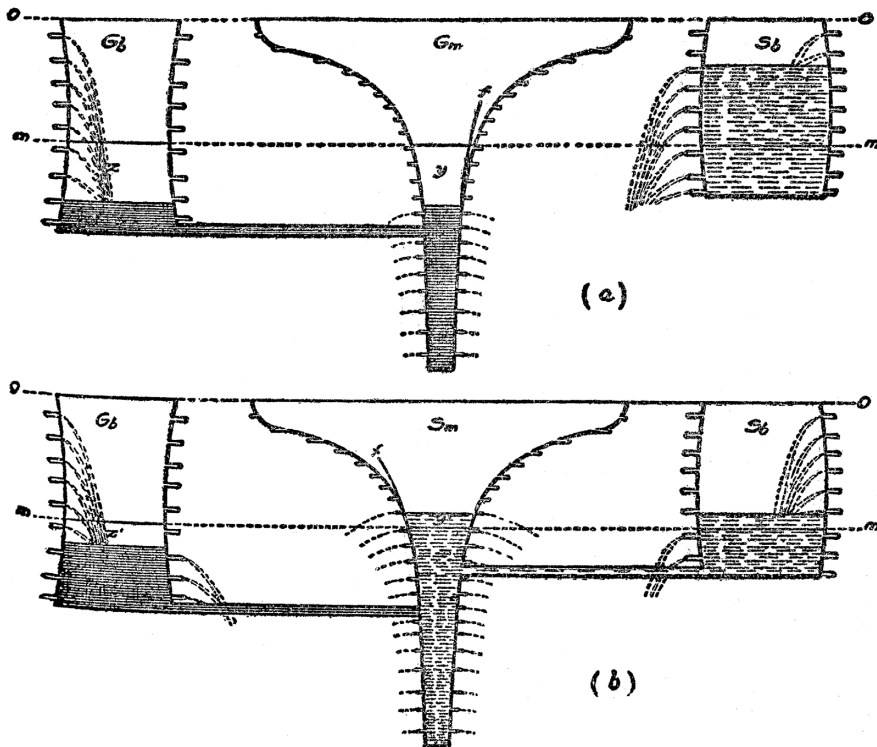
(51) フィッシャーは同時に、貨幣としての金と銀の代替関係の不完全性も考慮に入れている。「このこと（金貨と銀貨の代替関係：引用者）は金属が異なる貨幣的使用のために異なって選好されるということを否定しない。それ故、小銭にとって金と銀は補完的な単位であり、十分な制度を形成するためには銅やニッケルさえ必要とされる。……複本位制はそれがこれらの選好を覆す限り、害だが、グreshamの法則が影響を受けない限り、その作用は影響を受けない。」Fisher (1894) p527, fn.2

(52) Fisher (1922) p117, 邦訳 153-154 ページ

(53) この比喩は彼自身が言うように、Jevons (1923,p140) のそれと同様である。Fisher (1922) p116 fn.1, 邦訳 153 ページ 注2 cf. Harvey (1894) p126

(54) Fisher (1922) p117, 邦訳 153 頁

図 2



(出所) Fisher(1922) p119

貨の貯水池が、そして鑄貨の貯水池と銀地金の貯水池 ( $S_b$ ) がそれぞれパイプで結ばれた。真ん中に位置する鑄貨の貯水池は移動可能な膜  $f$  によって左の金貨ストック ( $G_m$ ) と右の銀貨ストック ( $S_m$ ) に区分されている。

ここで「銀 1 単位 (貨幣であろうと、地金であろうと、銀の水一滴) は金 1 単位 (貨幣であろうと、地金であろうと、金の水一滴) の 16 倍の重量を含む<sup>(55)</sup>。鑄貨貯水池の「水 1 単位は 1 ドル金貨または 1 ドル銀貨を示す。我々が表したいのは、対応する単位当たりの相対的な購買力である。」<sup>(56)</sup> フィッシャーは 16 対 1

(55) Fisher (1922), 邦訳 154-155 ページ

(56) Fisher (1922), 邦訳 155 ページ



の法定比価を金銀の「単位当たりの相対的な購買力<sup>(57)</sup>」と捉えている。そして、こうした関係にある「金および銀の購買力」は図の  $00$  線以下の水面までの距離によって示される。

この時、金貨の購買力よりも銀地金の購買力が大きければ、銀地金は鑄貨ストックに流入せず、金本位制が維持される。他方、銀が「金よりも安価<sup>(58)</sup>」ならば、グレシャムの法則により、銀地金ストックから、銀地金が鑄貨ストックへ流入し、それに対応して、鑄貨ストックから金貨は金地金に転換されて金地金ストックへ駆逐される。先のフィッシャーの概念区分に従えば、「安価な貨幣」の銀貨が「高価な貨幣」の金貨を駆逐する、ということになる。「この駆逐は金にプレミアムが付く限り、すなわち地金貯水池の銀の水面が貨幣貯水池の金の水面よりも上にある限り、つまり銀地金が金貨幣よりも安価である限り、続くだろう<sup>(59)</sup>。」

ここで注意すべきは、フィッシャーが「金にプレミアムが付く」状態を、「銀が金よりも安価」であること、更に「銀地金が金貨幣よりも安価である」ことと同義とみなす点である。まず、彼は金のプレミアムを金と銀の購買力の相対的な関係から捉える<sup>(60)</sup>。プレミアムの発生を金と銀の購買力の相対的な関係から説くのは、明らかに誤りである。この誤解は、先に彼が金本位制下で金地金の市場価格が鑄造価格を上回る、すなわち金地金にプレミアムが付くのを、地金の価値と金貨の価値の相対的な変化としてしか把握できなかった点に通じる。しかも後述するように、この点は彼が複本位制のメカニズムを説く際に決定的に重要な意味を持つ。正確には、市場比価が法定比価を上回ると、金にプレミアムが付く。あくまでも法定比価を基準とした市場比価の騰落の問題である。そしてプレミアムが付くのは、金地金に対してであって、金貨に対してではない。価値の上昇した金属にプレミアムが付くからこそ、その金属からなる鑄貨は溶解される。そしてこの金のプレミアムは価値尺度の銀で測った金の鑄造価格を上回る、同

(57) Fisher (1922) p118, 邦訳 155 ページ

(58) Fisher (1922) p119, 邦訳 156 ページ

(59) Fisher (1922) p119, 邦訳 156 ページ

(60) ただし、金のプレミアムを金の購買力と銀の購買力の差と考えているわけではない。

じく銀で測った金地金の市場価格である。それ故、彼が「銀が金よりも安価」であることを、「銀地金が金貨幣よりも安価であること」と言い換えている点も彼の複本位制論の論点である。これは彼の「安価な貨幣」と「高価な貨幣」把握に関連する第二の問題点として後に検討する。

ここから二つの場合が考えられる。銀地金ストックが十分に大きい場合と、小さい場合である。まず前者の場合、銀貨は鑄貨ストックから金貨を完全に駆逐する。金地金ストックは増加し、銀地金ストックは減少する。金地金の購買力は低下し、銀地金の購買力は上昇する。更にフロー、生産と消費を考慮に入れると、金地金、銀地金それぞれの購買力に変化が生じる。金地金の購買力の低下により、生産は減少し、消費は増加する。よって金地金ストックは減少し、金地金の購買力は上昇する。銀地金の購買力の上昇により、生産は増加し、消費は減少する。よって銀地金ストックは増加し、銀地金の購買力は低下する。しかし両者の購買力は元の水準には戻らず、ただ両金属の購買力の差が縮小するのみである。「元々の二つの水面の間隔は縮小している。たとえ複本位制が両方の金属の同時の流通とある鑄造比価での価値の等価をもたらしることができないとしても、高価な金属 (dearer metal) (金) の価値を低下させ、安価な金属 (the cheaper) (銀) のそれを上昇させることになった。」<sup>(61)</sup> こうしてフィッシャーは「高価な金属」と「安価な金属」という新たな概念区分を導き出す。

銀地金ストックが小さい場合、複本位制が成立する。「言い換えれば、金地金のプレミアムは消滅するだろう、そしてその購買力と銀地金の購買力は元々の購買力の平均となるだろう。」<sup>(62)</sup> 生産と消費を考慮に入れると、金銀、共に生産量と消費量が等しいなら、金地金、金銀からなる鑄貨、銀地金の三つの貯水池の水面は一定に保たれ、三者の購買力が等しい「均衡状態」が生じる。フィッシャーはこれを「複本位制のメカニズム」では「静態的均衡 (static equilibrium)」<sup>(63)</sup> と、

(61) Fisher (1922) p121, 邦訳 158 ページ

(62) Fisher (1922) pp121-122, 邦訳 159 ページ

(63) Fisher (1894) p530

『貨幣の購買力』では「一時的均衡 (temporary equilibrium)<sup>(64)</sup>」と呼んでいる。

しかし必ずしもこの状態が成立するとは限らず、むしろ金および銀、各々の生産額と消費額は一致しないのが一般的である。すると金地金の購買力の低下により、生産は減少し、消費は増加する。それと「同時に」銀地金の購買力の上昇により、生産は増加し、消費は減少する。金地金ストックは減少し、金地金の購買力は上昇する。他方、銀地金ストックは増加し、銀地金の購買力は低下する。しかし先と同様に、両者の購買力がそれぞれ元の水準に戻ることはない。金地金と銀地金の購買力が「どの位より低く、より高くなるかは明らかに、その状況に応じた生産および消費の技術的条件に依存する。」<sup>(65)</sup>条件次第では、金地金の購買力と銀地金の購買力が逆転することも考えられる。フィッシャーはこの連続過程を先の「均衡状態」とは区別して、同じく、「複本位制のメカニズム」では「動的均衡 (dynamic equilibrium)<sup>(66)</sup>」と、『貨幣の購買力』では「正常な均衡 (normal equilibrium)<sup>(67)</sup>」と呼んでいる。これらふたつの「均衡状態」の相違は一つには均衡が持続する時間にある。前者の「均衡状態」は数ヶ月、数週間に過ぎないが、後者の「均衡状態」は「一旦、実現されると、生産および消費の条件が変化しない限り、永続的なもの」<sup>(68)</sup>である。

二つめに、金本位制において金の購買力の「正確な均衡点の実現されることはほとんど、または全くなく、均衡点を行き来して振動する振り子のように、常に均衡を求める傾向がある」のと同様に、複本位制において、金地金と銀地金の「均衡点」を中心として、市場比価は上下し、ある時は金に、またある時は銀にプレミアムが生じる。金にプレミアムが付く、すなわち「銀地金が金貨幣よりも安価」な間、銀貨とプレミアム付きの金（フィッシャーによれば金貨）が共に流通する複本位制が成立する。しかし金のプレミアムが拡大しある限界に達

(64) Fisher (1922) p124, 邦訳 162 ページ

(65) Fisher (1922) p123, 邦訳 160 ページ

(66) Fisher (1894) p531

(67) Fisher (1922) p124, 邦訳 162 ページ

(68) Fisher (1922) pp124-125, 邦訳 162 ページ

すると「金は、今や安価になり、流通に流入し、銀に取って代わるだろう<sup>(69)</sup>。」他方では、プレミアム付きの銀（フィッシャーによれば銀貨）と金貨が共に流通する複本位制が成立する。銀のプレミアムが拡大し、もう一方の限界に達すると「銀は金よりも安価になり<sup>(70)</sup>」反転する。これがフィッシャーのいう複本位制の「動的均衡」または「正常な均衡」である。「これらのプレミアムは複本位制を破壊することなく、存続可能な一定の比価からの乖離を示す<sup>(71)</sup>。」もし前者の限界を越えたなら複本位制は崩壊し、銀本位制に、後者の限界を越えたなら金本位制となる。

フィッシャーはこの複本位制の「動的均衡」または「正常な均衡」が成立する条件、言い換えれば、金・銀に生じるプレミアムの限界を次のように考える。「複本位制は一つの比価では成立せず、別の比価があつて初めて成立する。複本位制が成立しうる範囲を規定する二つの比価が常に、存在するだろう<sup>(72)</sup>。」

「複本位制が存続しうる生産と消費の条件は、(1) 銀単一本位制のもとでは金ドルは均衡において、銀ドルよりも安く、(2) 金単一本位制のもとでは銀が金よりも安いことである。」このようにフィッシャーは (1) では鑄貨形態での購買力を比較し、(2) では地金形態での購買力を比較している。フィッシャーは購買力の相対的な大小によって、「安価な貨幣」＝「安価な金属」、「高価な貨幣」＝「高価な金属」と把握する。先の金本位制のもとでの「地金としての金の価値」と「貨幣としての金の価値」の等価関係からしても、鑄貨と地金との形態区分<sup>(73)</sup>はない。

しかし彼はこれに続けて、「それ故、複本位制が可能な時、複本位制の水面 (bimetallic level) は常に、金単一本位のもとでの二つの金属、金は通貨だが、銀はそうではない、がもつと仮定する水準の間にあり、同じ理由で、銀単一本位の

(69) Fisher (1922) p123, 邦訳 160 ページ

(70) Fisher (1922) p123, 邦訳 160 ページ

(71) Fisher (1922) p378

(72) Fisher (1922) pp123-124, 邦訳 161 ページ

(73) 注 (55) 参照。

もとでの二つの金属、銀は通貨だが、金はそうではない、がもつと仮定する水準の間にあるはずである。<sup>(74)</sup>と述べる。この結論からこう考えることができる。法定比価の一方の臨界点、すなわち銀貨とプレミアム付きの金が共に流通する複本位制と銀本位制を隔てる点は、銀本位制のもとでの銀貨の購買力と金地金の購買力の間にある。他方の臨界点、すなわち金貨とプレミアム付きの銀が共に流通する複本位制と金本位制を隔てる点は、金本位制のもとでの金貨の購買力と銀地金の購買力の間にある。この二つを限度として、複本位制は成立し、持続<sup>(75)</sup>しうる。こうして定まる範囲は複本位制が成立する条件としての法定比価の幅である。

しかしフィッシャーは、市場比価が「均衡」法定比価を上回り、金にプレミアムが生じる、あるいは市場比価が「均衡」法定比価を下回り、銀にプレミアムが生じるというように、市場比価の変動を「均衡点」を起点として拡散するものと捉えているのではない。そうした把握こそ、彼の批判の対象であった。フィッシャーが強調したのは、むしろ市場比価が「均衡」法定比価に収斂していく作用である。

フィッシャーによれば、二つの法定比価の限界の中心の「均衡」法定比価は、金地金の購買力と銀地金の購買力が複本位制以前の「元々の購買力の平均」となる点であり、しかも金および銀の生産と消費が等しく、金銀の両ストックが不変の状態を指す。金および銀ストックの相対的割合が一定と仮定し、市場比価とは異なる法定比価が導入されたとしよう。市場比価が法定比価を上回れば、金にプレミアムが生じる。過高評価された銀は銀地金ストックから鑄貨ストックへ流入し、同時に過低評価された金は鑄貨ストックから金地金ストックへ流

(74) Fisher (1922) p123, 邦訳 161 ページ

(75) Walras は以下のように述べる。「…複本位制は、商品であり貨幣である銀フランの価格が、単に商品でしかない金フランの価格より大であり、また、商品であり貨幣である金フランの価格が、単に商品でしかない銀フランの価格より大であるという条件のもとにおいてのみ行われる。」Walras (1926) pp340-341, 邦訳 368 ページ、原文ではイタリック。cf.Laidler (1991) pp158-159, 邦訳 169-171 ページ

(76) Fisher (1922) p122, 邦訳 159 ページ

出する。こうして銀地金ストックは減少し、銀鑄貨ストックは増加する。金鑄貨ストックは減少し、金地金ストックは増加する。この増加と減少は金地金と銀地金の購買力の比が「均衡」法定比価に下落するまで持続するであろう。逆に、市場比価が法定比価を下回れば、銀にプレミアムが生じる。金地金ストックは減少し、金鑄貨ストックは増加する。銀鑄貨ストックは減少し、銀地金ストックは増加する。この増加と減少は、購買力の比が「均衡」法定比価に上昇するまで持続するであろう。金・銀のプレミアムは均衡を破壊するものではなく、新たな均衡を作り出す力であって、あたかも水面に立った波が新たな平準化を求める様子に喩えられる。「複本位制はわずかなプレミアムも避けることができないことが分かるだろう。逆にある均衡点から別の均衡点への変化を強制する力を与えるのは、この水面の差である。<sup>(77)</sup>」「これらの小波は実際は、平準を求める過程の証拠であり、万一、法定比価が無かったなら、多分、起こるであろう変動と比べてわずかに過ぎない。<sup>(78)</sup>」

フィッシャーによれば、「動態的均衡」または「正常な均衡」におけるこの収斂メカニズムを機能させているのは、プレミアムの存在と共に、量の変動でもあ<sup>(79)</sup>る。それは複本位制下の金の購買力と量、銀の購買力と量、そして両者の関連で明らかになる。銀の購買力の変動と金の購買力のそれとは逆の変動について、フィッシャーは、両者が鑄貨ストックを媒介として、相互を同時に規定すると考える。フィッシャーは「動態的均衡」または「正常な均衡」における反転のメカニズムを説く際に、「銀の価値の上昇は生産を刺激し、銀鉱山の採掘をもたらし、他方、金の価値の低下は金生産を妨げ、金鉱山を閉鎖する<sup>(80)</sup>」ことを論拠としていた。フローとしての把握である。当期の新産銀は直ちに既存銀ストックへの純追加となる。「これら（生産と消費：引用者）の条件のわずかな変化、鉱山の枯渇、新しい鉱脈の発見等、も金および銀貨幣の割合の、すなわち膜 $f$ の位置

(77) Fisher (1922) p126, 邦訳 164 ページ

(78) Fisher (1922) p135, 邦訳 177 ページ

(79) cf. Walras (1926) pp324-325, 邦訳 350 ページ

(80) Fisher (1922) p120, 邦訳 157 ページ

のわずかな変動をもたらすだろう。(二つの別個の商品の場合のように価格比ではなく) この膜の振動がこれらの条件の変化を反映する。<sup>(81)</sup> 膜 $f$ の移動によって表されるように、金・銀貨ストックの割合に変化が生じる。その結果、「複本位制は、どのようなある変動の影響も、結合した金および銀市場に広げる。」<sup>(82)</sup>

フィッシャーの「複本位制のメカニズム」を、反転における金地金の購買力の変化と、それとは逆の銀地金の購買力の変化に注目すれば、金・銀のプレミアムが新たな均衡をもたらす力である。他方、反転における一方の金属の購買力の変動は直接的には当該金属のフローの変化をもたらし、ストックの変動を通じて、他方の金属の購買力の変動とフローの変化を生じる。このようにフィッシャーは水力学の比喩を援用することによって、「均衡点」への収斂の作用をプレミアムと量との両者から統一的に説いたのである。

#### 4 おわりに

金銀市場比価は、生産・消費の変動に応じて、「均衡」法定比価以上または以下に変動して金または銀にプレミアムを生じる。鑄貨貯水池への流入、または鑄貨貯水池からの流出を招き、それに応じて鑄貨貯水池内の金貨と銀貨の量の相対的割合は変動し、「均衡」金銀比価が回復する。いったん、法定比価を金地金と銀地金の「元々の購買力の平均」である「均衡」金銀比価に定めれば、複本位制国の裁定を通じて、市場比価は法定比価に収斂し、長期にわたって安定する。このようなフィッシャーのいわば「複本位制の自動調節作用」といえるものの必要条件が、(1) 一定の比価での両金属の自由かつ無制限鑄造、(2) その比価での各金属の無制限法貨、である。

以上の二つは制度的条件に過ぎず、実際に「複本位制の自動調節作用」が働く要件はそれだけではない。フィッシャーは複本位制下の金（金地金、金貨）の購買力、および銀（銀地金、銀貨）の購買力の変動をもつばら「主な要因」で

(81) Fisher (1922) p125, 邦訳 162-163 ページ

(82) Fisher (1922) p126, 邦訳 164 ページ

ある金・銀生産の価格弾力性から説いている。そして新鉱山の発見、鉱山の枯渇、金・銀生産技術の進歩といった要因を考慮から除いている。これらの「その他の重要な変動」とは、具体的には、1848年のカリフォルニア、1851年のオーストラリアでの金発見、銀に関しては1859年のカムストック鉱山の発見、1888年の銀抽出での青化法の導入、1891年の金抽出でのシアン化法の導入、1890年代以降の南アフリカ、アラスカでの金の発見である。フィッシャーはこれらの要因を捨象し、複本位制の「動態的均衡」、「正常な均衡」における反転メカニズム、「銀の価値の上昇は生産を刺激し、銀鉱山の採掘をもたらし、他方、金の価値は金生産を妨げ、金鉱山を閉鎖する」論拠を「主な要因」にのみ求めている。さらにフィッシャー自身が言うように、「貯水池の形状または大きさの変化」によって表される貨幣需要は一定と仮定している。「以下の原因、すなわち人口、企業取引量と性質の変化、信用等、のネットの影響を示す貯水池の形状または規模の変化は、<sup>(83)</sup>明示的に考えられていない。」これらに加えて、「均衡」法定比価を設定する必要がある。

自由銀運動への妥協によって成立した1878年法および1890年法の内容は、「財務省の銀購入によって銀の価格を維持する」というものである。これは「貨幣管理 (monetary management)<sup>(84)</sup>」を意味する。これに対して、フィッシャーの「複本位制の自動調節作用」とは、いったん適正な法定比価を設定すれば、裁定取引を通じて金銀市場比価が長期間、安定するという意味である。適正な法定比価を設定するという意味では人為的要素が入り込むものの、調節作用自体は民間当事者の行動に委ねられており、「貨幣管理」の性格としてはより弱いものである。もちろんここには中央銀行、政府といった通貨当局は存在しない。また、フィッシャーの「複本位制のメカニズム」論は国際的な貨幣協力でもないという点で、各国間に共通の金銀法定比価で自由鑄造をおこなう国際複本位制とも異なる。1878年、1881年、1892年の国際貨幣会議でアメリカはこの国際複

(83) Fisher (1894) p530, fn.3

(84) Schumpeter (1954) p1077, 邦訳6, 2264 ページ



本位制を主張した。

フィッシャーのいう「複本位制の安定化作用 (the steadying power of bimetal<sup>(85)</sup>lism)」とは第一義的には、金銀の「相対的な購買力」の安定性、または水力学モデルでの「複本位制の水面」の安定性、すなわち金銀市場比価の安定性を意味する。この安定化作用に関して、フィッシャーが強調したのが「複本位制のメカニズム」では「動態的均衡」、『貨幣の購買力』では「正常な均衡」という同じ内容の概念であった。フィッシャーは「複本位制のメカニズム」でこう述べている。「Walras 教授の『複本位制の数学的理論』…で彼は全く異なる方法によってほとんど同じ基礎をカバーし、『静態的』<sup>(86)</sup>均衡に関連するこの論文のその部分と、実質的に全く同じ結論を著している。」<sup>(86)</sup>このようにフィッシャーは「動態的均衡」こそ、複本位制における彼独自の「均衡」概念であると主張する。「動態的均衡」は「静態的均衡」と共に複本位制における「均衡」を構成する。前者は時間の経過と共に、金・銀のプレミアムと地金および鑄貨ストックは不断に変動し、後者は時間の経過を通じてどちらにもプレミアムは付かず、地金および鑄貨ストックも一定不変に留まっている。この意味で「動態的」および「静態的」均衡である。そして両者にはそれぞれ「長期」と「短期」均衡という区別が対応する。彼自身、「動態的均衡」とは言っても、あくまでも「均衡」に重点がある。だからこそ『貨幣の購買力』では「正常な均衡」と言い換えている。1894年「複本位制のメカニズム」におけるフィッシャーの焦点は「均衡」にあった。本論文で動態論と呼べるものは、1893年恐慌に関する以下の記述のみである。「…信用の収縮（通貨貯水池の拡大）と金の退蔵（同上）は逼迫をもたらす（通貨の水面の低下）。これは、銀貨幣の下落の単なる恐れからアメリカで最近、<sup>(87)</sup>起ったことである。」

(85) Fisher (1922) p126

(86) Fisher (1894) p529, fn.1

(87) Fisher (1894) p536, fn.3

## 引用・参考文献

- Bordo, M.D. (1984), "The Gold Standard: The Traditional Approach" in *A Retrospective on the Classical Gold Standard, 1821-1931* editor M.D.Bordo and A.J.Schwartz, Chicago and London:University of Chicago Press
- Chen, C. (1972), "Bimetallism: Theory and Controversy in Perspective" *History of Political Economy*, vol.4 no.1, Spring
- Edgeworth, F.Y. (1895), "Thoughts on Monetary Reform" *Economic Journal*, vol.5, September
- Fetter, F.W. (1932), "Some Neglected Aspects of Gresham's Law" *Quarterly Journal of Economics*, vol.46 no.3, May
- Fisher, I. (1892), *Mathematical Investigations in the Theory of Value and Prices*, New Haven: Yale University Press
- (1894), "The Mechanics of Bimetallism" *Economic Journal*, vol.4, September
- (1922), *The Purchasing Power of Money*, New and Revised edition, reprint 1963 New York: Augustus M.Kelley Bookseller 金原賢之助・高城仙次郎共訳『貨幣の購買力』改造社, 1936年
- Flandreau, M. (1996), "Adjusting to the Gold Rush: Endogenous Bullion Points and the French Balance of Payments 1846-1870" *Explorations in Economic History*, vol.33 no.4, October
- (1997), "As Good as Gold? Bimetallism in Equilibrium, 1850-70" in *Monetary Standards in History*, 1997 editor L.Officer, London: Routledge
- Friedman, M. (1953), "Commodity-Reserve Currency" in *Essays in Positive Economics*, Chicago and London: University of Chicago Press
- (1990), "Bimetallism Revisited" *Journal of Economic Perspectives*, vol.4 no.4, Fall
- Greenfield, R.L.& Rockoff, H. (1995), "Gresham's Law in Nineteenth-Century America" *Journal of Money, Credit and Banking*, vol.27 no.4, November, Part I
- Harvey, W.H. (1894), *Coin's Financial School*, reprint 1963 editor R.Hofstadter, Cambridge: Harvard University Press
- Hegeland, H. (1951), *The Quantity Theory of Money*, reprint 1969, New York: Augustus M.Kelley Publishers
- Jevons, W.S. (1923), *Money and the Mechanism of Exchange*, 25th ed., London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.Ltd. 松本幸輝久訳『貨幣及び交換機構』日本図書株式会社, 1948年
- Laidler, D. (1991), *The Golden Age of the Quantity Theory*, London: Philip Allan 石橋春男他訳『貨幣数量説の黄金時代』同文館, 2001年
- Laughlin, J.L. (1903), *The Principles of Money*, New York: Charles Scribner's Sons
- Mill, J.S. (1848), *Principles of Political Economy: with some of their applications to social*

- philosophy* in *Collected Works of John Stuart Mill* vol.Ⅲ textual editor J.M.Robson, 1965, Tronto : University of Tronto Press 末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫 (三), 1959年
- Oppers, S.E. (2001), “Recent Developments in Bimetallic Theory” in *Money and Politics : European Monetary Unification and the International Gold Standard (1865-1873)* editor L.Einaudi, Oxford and New York : Oxford University Press
- Seyd, E. (1868), *Bullion and Foreign Exchanges*, reprint 1974, New York : Arno Press
- Schumpeter, J.A. (1910) “Marie Éspirit Léon Walras”, *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Bd.19
- (1954), *History of Economic Analysis*, New York : Oxford University Press, 東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店, 1960年
- Walras, L. (1881), *Théorie mathématique du Bimétallisme*, Paris : Librairie de Guillaumin
- (1926), *Éléments d'économie politique pure : ou, Théorie de la richesse sociale*, Paris et Lausanne 久武雅夫訳『純粹経済学要論』岩波書店, 1983年
- Willis, H.P. (1896), “The History and Present Application of the Quantity Theory” *Journal of Political Economy*, vol.4 no.4, September
- 酒井一夫 (1977) 『インフレーションと管理通貨制』北海道大学図書刊行会